

## 水墨画展によせて

## 可翁筆竹雀図について

水墨画特有の技法と、水墨画のもつ味わいとをいかに示した作品に、この竹雀図（紙本墨画、90.5×30.1センチ）があります。

画中にはただ小さな竹が二、三本、風に吹かれていて、そして雀が一羽、岩の上にとまっていて空を仰ぎ見ている。単にそれだけの画であります。静かにこの画を眺めていると、雀が見ている大空が実に高大に拡がっていることが切実に感じられ、豊かな気持ちになっていきます。すがすがしい空気すら感じます。

竹は力強い濃墨の一筆描きで一気に描き、その筆法は、書の草書と同じです。大きく反り返る枝葉は竹の勁さとしなやかさを表わし、また淡墨を用いることによってそこに光があることを暗示しています。三か所の枝葉の微妙な墨調の違いによって、前後の奥行きを表わしており、これは一種の空気遠近法的表現といえるでしょう。

また、小さく開いたくちばし、小さな丸い眼、びんどのぼした片足の描写に、雀の敏捷な性格が現われています。

雀は日向ぼっこが好きな鳥です。陽が差すと、チュンチュンと活発な喜びの声を出し、尾をピンピンうごかし、首を上下に振ったりして、次の瞬間に飛び立ちます。そんな日常どこにでも見られる情景をこの画家は優しい眼でじっと見つめていたにちがいません。

この画はちょっとした竹や雀のうごきを通じて、大きな空間の拡がり、陽のかがやき、静の中の動、動の中の静、勁さとしなやかさ、といったことを表現しようとした作品ではないでしょうか。この画のすきのない構図と緊張感はずの悟りに通じていると思われ。この画はあくまで写実を基本としながら、精神的内容の絵画に昇華した作品であり、永遠の名画といって過言ではないでしょう。

図の左下に「可翁」、その下に「仁賀」と読める小印が捺されています。可翁は南北朝時代の14世紀前半に活躍した禅宗系の初期の水墨画家で、その伝記は不明です。現在数点の作品が知られ、いずれも鋭い気魄のこもった表現が認められます。この画家については、中国に渡り修業を積んだ南禅寺の高僧可翁宗然がその人とする説が有力です。（林 進）

可翁筆竹雀図 南北朝時代



季刊 美のたより No.61

昭和57年 11月12日

発行 大和文華館